

【62】パナマ運河と渴水

トランプ大統領が、1999年にアメリカからパナマ政府に返還した、パナマ運河を取り戻すのに武力も辞さないと発言したこと、改めて注目されていますが、実は今、パナマ運河は渴水に悩まされいると伝えられています。

パナマ運河は、スエズ運河のように平らな運河ではなく、山がちな地帯を横断するのに、高さ 32m (105 フィート) のダムを築いて生み出したダム湖を運河というか航路としました。

運河全長 80km のうち半分くらいが人造湖の水面です。

従って、海面近くの運河からダム湖へ往復するのに、太平洋側と大西洋側のそれぞれに、閘門（こうもん）という船を上下させる設備が必要になります。

わが国でも戦前までは、利根川、木曽川、淀川など、各地の河川の支派川や水路に小規模な閘門があったのですが、現在ではほとんど使われなくなりました。

さて、このパナマ運河の主要部をなすダム湖（Gatun 湖）の水位が近年、低下してきて船の航行に支障が生じるとして、喫水の大きい大型船では、積荷の一部を降ろして鉄道で運んだり、大型船の航行を制限するとかしているとのことです。

このガトゥン湖の水は、通常のダム湖のように、灌漑用水、都市用水、水力発電にも使用されており、そっちの水需要が増えているので貯水量が減少する傾向にあります。そして近年の降雨量の減少による渴水が重なっているのです。

又、閘門本来の機能として、船が閘門を利用する一回ごとに 10 万トン近い水が海へ放流され、一日に数十隻の舟が通行するので、その水の使用量もバカになりません。

こういうわけで、ガトゥン湖の水面を維持することが困難になり、水位低下が進行しているようです。

地球温暖化による気象異変かどうかは別にして、渴水が運河の通行にまで影響するとは思いもなりません。